光こそいのちと人の言ひたれど影またいのち初日を歩く　伊藤一彦

四句切れである。四句で切れてやや長い間があって、ゆったりと第五句がくる。牧水の「幾山河……」の歌と音楽的に同じ構造。

初日の歌としてやや異色。死があって生が輝くように、影があって光は光たりうるのだ。光ばかりを言う風潮に、正月だからこその異見。

寂しさに寂しさ重ねているような香月泰男の手を見ていたり　今井洋子

「シベリアシリーズ」で有名な画家・版画家の香月泰男である。同シリーズに手が出てくる作がいくつかあり、それに取材しているようだ。昔、私が編集長をしていたころの雑誌「文芸」では、香月さんの絵を表紙に使わせてもらったこともあったが、現在ではあの暗さは理解しにくい。そこをあえて取り上げ、ていねいに表現した点に注目する。

火をかくし山は眠れりどつしりと土の重さを裾に広げて　松本秀一

火山である。活動期ではない活火山、あるいは休火山だろう。「山は眠れり」は季語の引用。重量感のある山の大きさを表現した堂々たる一首。

散居村は砺波と思い来し我に岩手の杉の囲む家々　岡部和美

散居村（さんきょそん）とは、屋敷林に囲まれた家が点在する富山県の砺波平野独特の集落。富山の作者ならではの旅の歌である。屋敷林は防風林だから、風が強い雪の多い地域には似たような村があるようだ。

「南極大陸」観つつ度々苦笑いす七次隊にて越冬せし夫　本川みや子

テレビドラマ「南極大陸」。私は見なかったが、ドキュメントタッチのリアルな場面が売りのドラマだったらしい。実際の南極体験者である夫がこれを見て、たびたび苦笑いしたという。「なるほど」の意味の苦笑いか、「まさか」の苦笑いか、その点は読者の読みにまかせる、という表現の仕方で成功。

右手もて水着の女（ひと）が指すそらよ　ふはふはなりき二十世紀は　本田一弘

昭和のはじめのシュルレアリズムの画家、有名な古賀春江の「海」である。「ふはふは」は、絵の中の空と関係があるのだろう。その点はいいのだが、二十世紀のどこがどう「ふはふは」だったのか、そのへんのニュアンスが分からない。

余談ながら、前川佐美雄『植物祭』の表紙はこの古賀春江。「海」の制作の翌年だった。

わが家族を三十六年楽しませ柿の大樹は老い伐られたり　湊美根子

三十六年は個人史ではかなり長い時間である。人間の一生をはかるのに六十年が単位となっているから、その半分以上の時間だ。その間に「わが家族」にはさまざまな出来事があったのだろう。人生を思わせる一首である。

ただ、柿にとっては三十六年の時間はどうなのだろう。ネットで見ると、柿の寿命は五十年から二、三百年だという。参考までに。

日々の朝の空気を確かめる死ぬのは朝と決めているから　三宅徹夫

下句を読んで、おっと思う読者も多いだろう。自身の死を場面としてイメージしている珍しい一首だからであ

短歌の現在

No.380　今月の15首を読む

佐佐木幸綱